

## 中国における農民の移動性をめぐって

東 美晴

### はじめに

本稿は、中国社会に対する一つの研究視角を検討することを目的としている。それは、移動を視野に入れた社会構造の記述に関するものである。

筆者は、中国社会を移動性が高い社会であるという印象を持っている。かつて、筆者は上海郊外農村の調査を通し、解放前の農村におけるジェンダー構造の研究を行った。その際には、基本的な地域社会の描写として、いくつかの非常に小規模な自然村が一つの廟を中心にまとめられ、一つの地域をなしていることを示した（東, 1997, 51-54）。そして、当時この小さな自然村に暮らす農民像を描く際に、せいぜい廟界内を生活世界として定住生活を営む者を念頭に置こうとした。だが、日常生活はその範囲内におさまる程度であったが、その日常生活を手に入れるまでの過程は大きくその範囲を超えている者も多く含まれていた。

たとえば、当該地域の女性のもとへ婿として入ってきた男性の経歴の中には、遠く広東省や通州からという者もあれば、松江、嘉定など他県から来た者もあった（東, 1997, 112）。特に遠方から来て当該地域で婿となり、定住した男性の場合には、流れるうちに当該地域に行き着き、雇農となっていたという経歴を持っていた。また、女性についても同様に浙江省からなんらかの事情で当該地域へ嫁いできた者が4人あった（東, 1997, 117）。

また、当該地域にはクリークが網の目のように通っているが、その細かいクリークを移動しながら暮らす零細な漁民がいた。彼らの集団の有り様については、大きくは「進教人（カトリック信者）」と「外教人（非カトリック教徒）」に分けられ、それぞれ個々には非定住であるが、所属する教会や廟を持っていた（東, 1997, 54-59）。筆者がこの調査において接することができた、非定住者は漁民のみであったが、革命以前の中国社会には、これ以外にも小商人や職人など、多様な漂泊者があった。

さらに、筆者は平成15年～17年にかけて、中国における観光の研究に携わってきた<sup>(1)</sup>。この研究における中心的テーマは中間層の観光移動であったが、調査を通して訪れた周庄镇、麗江鎮などにおいて、観光地および観光産業が多くの外来者によって支えられているのを目にしてきた。観光地は土産物を商う小商人や工芸職人達にとって格好の商売の舞台である。他地域から観光地へ移動し、そこに店舗を借りて営業することで、観光地独特の賑わいを形作っていく。ここでは、農村からよりよい賃労働を求め都市を目指し、都市を拡大させていく、近代化における移動の原理とは異なる形態が見いだされた。

こういった経験を通し、筆者は移動に対する関心を持つようになった。本稿では、費孝通の『中国農村の細密画』を用い、農民像の見直しを通して、研究視角の探求を行いたい。それは具体的には農民の移動性に関する検証である。

## 1. 費孝通と『中国農村の細密画』

費孝通の代表的著作の一つである『中国農村の細密画』は、太湖畔の村、開弦弓村において1936年、57年、80年の3回に渡り行われた調査をもとにしたものである。費孝通は自身の開弦弓村との出会いを以下のように語っている。

北京大学卒業後、私は精華大学の大学院に入学した。そして大学院修了と同時に、英国留学のための奨学金が私に与えられることになった。精華大学での私の指導教官は高名なシロコゴルフ教授であったが、シロコゴルフ教授は私が留学することになったことを知ると、手ぶらで行くのではなく、留学先での研究に使えるような何かしかりしたデータをもって留学するようにアドバイスし、まず中国の少数民族地区に行ってそこで社会調査をすることを勧めた。そこで私は、〔今の〕広西壮族自治区にある金秀瑶族自治县に調査に行くことにしたのである。ところが、その調査の最中に起きた不幸な事故によって私の最初の妻は死亡し、私自身も腰と足とに重傷を負ってしまった。私は瑶山を出ると、まず広州へ行って治療を受けた。そして広州での治療のあと、その頃姉が開弦弓という村で農民たちが合作製糸工場を運営するのを手伝っていたので、私もそこへ行くことにした。こうしてこの時、私は開弦弓村に丸一ヶ月滞在したのである（費、1983, 9-10）。

開弦弓村は蘇州と杭州の間に位置し、中国の製糸業の中心部にあった。だが、当時は日本の製糸業の急速な発展により、日本製の生糸が中国製の生糸を国際市場から駆逐し始めた時期であった。このため、蚕糸業の衰退が起これ、農民達の暮らしも圧迫された。このような状況に対し、知識人グループとしての省立女子養蚕学校の教師および学生達

が、農民に科学的な養蚕の技術を教える活動を行っていた。費孝通の姉はこのメンバーの一人であった。開弦弓村では苦難の末にこの運動は受け入れられ、農民自身による流通システムの改善、自身の製糸工場の設立にと実っていく。

費孝通は開弦弓村のこのようなデータを持って、英国へと渡る。そして『中国農村の細密画』の第一部となる *PEASANT LIFE IN CHINA* が書かれることになる。その経緯を費孝通は以下のように語る。

私は、彼らの行動の正当性とその意義に深い感銘を受けた。自分たちの悲惨な境遇を改善するために、彼らが一つに団結して体制に挑んでいく様子に賞賛の念を禁じえなかったのである。私は、このことを世界中に知らせることが、自分の義務だと感じた。開弦弓村に滞在した一ヶ月の間、私は自分の知りたいと思ったことはすべて農民に質問した。こうして集めた非常に価値のあるデータをもって、私はロンドン大学の経済学部で留学したのである。そこで私の指導教員となったマリノフスキー教授に開弦弓村のことについて話したところ、マリノフスキー教授はぜひその問題をテーマにして博士論文を書くようにと私を励ましてくれた。それまでの文化人類学的な研究は、どれも先進国の学者によってなされたものであった。つまり、宗主国の白人が植民地支配下の後進国の人々を研究するというパターンだったのである。私の場合には、中国人自身が中国社会について書き、しかも、農民に対して共感を抱いている者が農民について書くことになったので、他のものからでは知ることができないような論文を書くことができた(費, 1983, 12)。

## 2. 鶴見和子の費孝通論

### (1) 内発的発展論の原型として

鶴見和子は『内発的発展論の原型』において、日本では柳田国男を、中国では費孝通をその先駆者とみなし、二人の研究者の方法の比較を行っている。

また、鶴見の「内発的発展論」は近代化論批判として生じたものである。以下は鶴見の、近代化論に対する内的発展論の位置づけである。

近代化論は、地球上すべての社会に適応することのできる「一般理論」として構築された。これに対し、内発的発展論は、それぞれ多様な個性を持つ複数の小地域の事例を記述し、比較することをとおして一般化の度合いの低い仮説あるいは類型を作っていく試みである。近代化論を「理論」とすれば内発的発展論は「原型理論」と特徴づけることができる(鶴見, 1996, 36)

また、鶴見は、柳田と費を内発的発展論の原型と見立てる六つの観点を列挙している。

第一の観点は、「理論とその理論をもって分析する対象との関係」である。鶴見は、欧米において抽出された理論を欧米社会の分析に用いるならばホモロジカル（相同的）な接近法であるが、それを他の社会に用いる場合にはヘテロロジカル（非相同的）な接近方となる。だが、費孝通と柳田は中国、日本のそれぞれにおいてホモロジカルな方法、つまり自社会から独自に抽出した方法を用い分析を試みた先駆者であるとする（鶴見、1996, 36）。

第二の観点は「研究者と研究対象の関係」である。民族学・人類学は西欧の研究者が他社会である「未開」の部族社会を調査することによって成立してきた。これに対し、1980年代にはクリフォード・ギアーツが「かつての植民地原住民は、今日では世界の「周辺人」となり、かれら自身が自社会研究を発表し始めた。帝国主義の崩壊とともに西欧のエスノロジストや人類学者の中には、己れの学問に疑問をもつものがあらわれ始めた」と語るように、従来の人類学に対する自省が語られ始めている。だが、柳田は1910年代から、費は1930年代から、それぞれ「西欧の学問を学びながら、自前の方法を編み出して、自社会研究を行ってきた」先駆者であるとする（鶴見、1996, 38）。

第三の観点は、「調査の単位は地域」だという点である。鶴見によれば、近代化論は、全体社会（国民国家と境界を一つにする）を単位として組み立てられた社会変動論であるが、これに対して内発的発展論は地域を調査の単位とするものである。費も柳田も、地域を単位とした調査をおこない、村と町を連続体とみなしている点で共通するという（鶴見、1996, 38）。

第四の観点は、「近代化論には、自然環境への配慮がまったくない」が、内発的発展論は、地域の生態系と調和した発展を強調するものである。地域の自然生態系と社会変化との関係は、費にも柳田にも顕著にあらわれている、という（鶴見、1996, 38）。

第五の観点は「近代化論では、前近代と近代とを、社会構造、人間の行動・思考様式などにおいて截然と区別する」が、内発的発展論では、地域に集積された社会構造および精神構造の伝統を重視する。現代の問題を解決するために、人々は伝統の中から役に立つものを選び出し、それを新しく創り直して使うことができるという。この点において、伝統の革新は両者にとって重要な課題であったという（鶴見、1996, 38）。

第六の観点は「近代化論は、経済成長を主要な発展の指標とする」が、内発的発展論は、人間の生長を主要目的とし、経済成長をその条件とみなす、という。この点に関しては、柳田が「心意現象」を最も重要な研究項目としたこと、費については「経済よりもっと重要なのは、人の変わり方である」という座談会での談話を記している（鶴見、1996, 39）。

## (2) 郷鎮企業と内発的發展

上記の第一から第三の観点までは研究に対するスタンス、方法に関するものであるが、第四から第六は理論に関わるものである。鶴見は費の構築した論理の中に内発的發展論を見いだしているわけであるが、その典型として「模式（モデル）論」を取りあげておく。

一九八三年の「蘇南モデル」から始まった費の「模式」という言葉の選択には、「一つの地域で起こったことを、他の地域におしつけて模倣させるという意味の手本ではないこと」「各地の事情に合わせて、異なる發展の経路があることを強調する」ためであったという（鶴見, 1996, 73）。ただ、ここでいう發展は郷鎮企業の發展であり、そのモデルは郷鎮企業の發展を通しての地域經濟發展のモデルである。そのもととなった蘇南モデルは一九八一年までの開弦弓村の調査の上に、江蘇南部の農村地域全体にわたって調査を続けた結果、抽出されたものである。

元來費は農村工業を重要なものとみなし、何度も提唱を行っている。これは『中国農村の細密画』の各部において語られる。まず、第一回目の調査報告である「中国農民の生活——一九三六年——」では、その最後を「中国の農業問題」で締めくくる。そこでは農業問題の最終的な解決が農村工業の復興にあることがしめされている。

中国の農業問題の最終的な解決は、農民の支出を削減することではなく収入を増加することである。それゆえに繰り返しになるが、工業復興が本質的問題である。中国の伝統的工業はおもに農村のものであった。たとえば、すべての織物工業は以前は農民の職業であった。現在の工業發展の直接的な影響で、中国は事実上この伝統工業の急速な衰退に直面している。この過程を阻止することによって、中国は西洋列強と衝突することになる。この衝突をどのように平和的に解決するかという問題は、他の有能な科学者と政治家の手に委ねたい（費, 1983, 154）。

次に、二度目の訪問の記録である「開弦弓村再訪——一九五七年——」においては、農業生産量の増加にもかかわらず、副業の衰退が農民の生活水準の向上を妨げていることが分析されている。そして、農村工業の必要性を以下のように論じている。

次に、非常に重要な意義を持っていると私が信じる一つの問題に触れたいと思う。つまり、このような原料生産地としての農村に、これから軽工業をおこす可能性や必要性があるのかどうか、という問題である。この点に触れるのには、私なりの個人的な動機がある。二年前、私はこのように小さな工場が農村經濟の發展に果たす利点を自分の目で見ているからである。そこから受けた影響がとても深かったので、解放前多くの文章を書いて、いわゆる「郷土工業」を提唱したことがあった。しかし、あるいは私の議

論に明確さを欠くところがあり、また、国民経済におけるこのような小型軽工業の地位を強調しすぎたところがあって、思想改造の時にブルジョア思想家と見なされて厳しく批判された。いま冷静になって考えてみると、当時の私の考え方に誤りがなかったとは言えない。その誤りは重工業を軽視したことであって、これは批判されてもしかるべきものだった。にもかかわらず、農村工業に関する問題は、かつてと同様今でもやはり研究に値する問題だと感じており、いくつかの点で、それは我が中国の状況に極めて適合したものだとしている（費，1983, 209-210）。

さらに、三度目の訪問の記録となる「今日の開弦弓村——一九八一——」では、費が長年提唱してきた農村工業が、開弦弓村において既に現実となっている。この部の締めくくりには、感激をもって農村工業化の展望が示されている。

これまで示してきたデータから得られる第二の重要な結論は、中国においては農村工業の発展、育成が大きな重要性をもつということである。中国のように人口が過密な国では、飢餓の問題を解決したあと、さらに農村の生活水準を向上させるためには、大都市に少数の大工場を集中させるのではなく、さまざまな種類の小規模な工場を広大な農村に分散させていく方法を取るべきなのである。現在開弦弓で起きていることは、同時に中国の他の多くの地方でも起きており、かつては貧しかった生産大隊が、副業や農村工業の導入によって、次々と貧困の悪循環から脱けだしているのである。農村工業の導入は、国家経済全体において工業労働者の割合を増加させるばかりでなく都市への過度の人口集中を避ける効果を持つ。このように、農村工業を導入することによって、他の場合にはどうしても生じてしまう労働者と農民の間の格差拡大を防ぐことができるのである。それゆえ、開弦弓で目にした大きな変化はとりわけ私を感激させたのだった。私の長年の夢がいま現実のものになろうとしている。我々はそこに中国農村の工業化が開始されたことをはっきりと見ることができる（費，1983, 260-261）。

蘇南モデルは上記のような開弦弓村の農村工業化の経緯を踏まえ構築されたものである。鶴見はこの特徴を以下の四点にまとめている。

第一に河川、湖、運河が網の目のように張り巡らされているという揚子江下流地帯の地理的特徴の上に成立したものである。元来、この地域は人口に比して耕地が少ないために、農民は農業だけで暮らしていくことができず、副業がおこなわれていた。この副業は、水路の発達により発展が促された。特に、水路の発達により農村と小城镇の緊密な結びつきが作られてきたことが、一九八〇年代の小城镇工業化の基盤となったという（鶴見，1996, 102）。

第二に、蘇南における小城镇化の目標は「離土不離郷」（土地を離れて故郷を離れず）

である。村の中、村の周辺に工業を興すことで、農村の過剰人口は昼にはそこで働き、夜は村の家に帰る。費は「離土不離郷」は農村の過剰人口を打開するための農民の知恵であり、かつて土地の不足を副業で補ったように、今日では工業で補っている、と解釈する（鶴見, 1996, 102）。

第三に蘇南の郷鎮企業の特徴は集団所有の性格が強く、費はこれを中国の大家族の伝統に根ざすものと解釈する（鶴見, 1996, 102）。

四番目に、郷鎮企業は「反哺」（哺育のお返し）を守るものであるという。費による解説は、すなわち郷鎮企業は、もともと農民が農業で働いて得た収入と農業労働の余暇を投じて作った社隊企業を引き継いだものである。それゆえ、農民からすると、工業は農業の息子であり、母である農業が老いればそれを助けなければならない。このような伝統的な孝の思想が「以工建農」（工業をもって農業を建設する）の基盤となっているとする（鶴見, 1996, 103）。

以上のように、費の蘇南モデルの解釈には農村工業化の基盤には文化伝統や、地域に固有の歴史性的が色濃く反映されている。鶴見が「地域に集積された社会構造および精神構造の伝統を重視する」と言う点で、ここにまさに内発的発展論を見いだすことは当然である。

その後、1993年に鶴見は蘇南を訪れる。そこで目にした光景は、もはや「内発」では収まりきれない経済発展であった。各地で農地が小規模な開発区に変えられる。農村地域内であるが、非農業人口の居住地としての新型の小城鎮が次々に生まれる。多くの企業は国際化し、海外の先進技術や管理方式を取り入れ、海外輸出向けの製品を生産する。これらの企業は、周辺の蘇北、安徽、河南などからの大量の出稼ぎ労働者を受け入れる。一方で、その代償としての環境汚染が進行する、などであった（鶴見, 1996, 105-111）。

### 3. クリフォードのマリノフスキー論

ここで少し横道にそれる。費孝通がロンドン大学で師事したマリノフスキーについて、クリフォードの言及を示しておきたい。

マリノフスキーは人類学・民族学の歴史を語る上で欠くことができない人物である。クリフォードが民族誌的權威の形成において論じた一節に、マリノフスキーは以下のように登場する。

十九世紀末には、民族誌家に対して、先住民の最良の解釈者という地位をアプリアリに保証するものは何もなかった——一方に旅行者、とりわけ伝道者や行政官がいて、彼らのなかには民族誌家よりもずっと長く現地にいる者や、調査のためによりよい人脈

や言語使用能力をもっている者がいたからである。フランク・ハミルトン・カッシング（特異な人物）からマーガレット・ミード（国民的な著名人）に至る、アメリカのフィールドワーカー像の変遷には興味深いものがある。この期間を通じて、権威のある独特な形態が作り上げられたのである—つまり、科学的に有効と認められていると同時に、唯一無二の個人的経験にもとづいた権威，ということだ。一九二〇年代にはマリノフスキーが、フィールドワーカーの信頼性確立のために中心的な役割を果たした。彼がフィールドでの競合者の能力に再三攻撃を加えた事実も、このことに照らして想起しておくべきである。たとえば植民地行政官のアレックス・レントウルは、大胆にもトロブリアンド諸島の親族概念に関する科学的発見に異を唱えたため『マン』誌上でその「警察裁判所的視野」を理由に破門宣告されている。フィールドにおけるアマチュアリズムに対する攻撃は、A・R・ラドクリフ＝ブラウンによってさらに推し進められた。イアン・ランナムが明らかにしているように、彼は厳密な社会法則群を発見することによって、職業的科学者というものを体現するに至ったのである。二十世紀前半に職業フィールドワークの勝利とともに姿を現したのは、一般的理論と経験的調査との、また文化分析と民族誌的描写との、新たな融合であった（Clifford, 1988, 41）

クリフォードは続けて、マリノフスキーを中心とするグループの登場によって人類学の職業的規範として集中的参与観察が確立され、「焚火のまわりの一隅に座り、見たり聞いたり質問したりし、トロブリアンドの生活を記録し解釈する者」という新しい「人類学者」イメージを提供したと記す（Clifford, 1988, 42-43）。だが、クリフォードが目指すのは民族誌というテキストがどのように生成されてきたかを解き明かすことであり、民族誌的権威の解体である。

後の章において、クリフォードは1914年から18年のトロブリアンド滞在中に書かれた私的な日記『マリノフスキー日記』と、その期間のフィールドワークから生まれた『西太平洋の航海者』の二つのテキストを通し、小説家コンラッドと比較を行いながら、人類学者としてのマリノフスキーの自己形成について論じている。1967年に出版された『マリノフスキー日記』におけるマリノフスキーは「現地のインフォーマントに対して怒りを感じ」たり、「たえずヨーロッパとトロブリアンド女性をめぐる妄想の虜となる」など、「人類学の一般的なイメージにちょっとしたスキャンダルをもたらした」という（Clifford, 1988, 126）。スキャンダラスさの源は、もちろん1922年に出版された参与観察という科学的方法を用いた調査に基づいて描かれた権威ある民族誌『西太平洋の航海者』と、それを記した高名な人類学者マリノフスキー像とのギャップにある。だが、クリフォードは敢えて二つの著作を拡大された一つのテキストと捉え、マリノフスキーの創造の過程を分析する。

こうしてクリフォードが導き出した解答は以下の二つの節のような言説として表現さ



れる。

民族誌的な理解（共感と解釈学的な関与の一貫した位置）は、民族誌的な経験の首尾一貫した質ではなく、民族誌を書くことによる創造とみなされるべきだと提案したい誘惑に駆られる。いずれにせよマリノフスキーが書くことによってなし遂げたのは（1）大量のフィールド・ノート、記録、記憶その他から、トロブリアンド島民という虚構の創造をすることであると同時に、（2）新しい公的人物、フィールドワーカーとしての人類学者、マーガレット・ミードなどによってさらに精妙に作り上げられることになるペルソナを構築することであった（Clifford, 1988, 144）。

私たちは、『闇の奥』のなかの「野蛮人を殲滅せよ」という、クルツの暴力的な殴り書きの運命を思い出す。野蛮人の風習に関するクルツの長い論文をベルギーの出版社に渡すとき、マーロウは、悪罵しつつも真実を語っている補遺を破り捨てる。その身振りは多くを物語っており、マリノフスキーと人類学者に関して、厄介な疑問を提起している。すなわち、公的で信じることに足る言説を構築するために、つねに破棄されてきたものは何なのか。『遠洋航海者』において、ひとつの文化（トロブリアンド）と一つの自己（科学的民族誌家）に全体性を与える過程で、『日記』が排除され、上書きされたのである。こうして、フィールドワークにもとづく人類学という学問は、その権威を作り上げるなかで、首尾一貫した文化的他者と解釈する自己とを構築してゆくのである。この民族誌的な自己形成が省略と修辭という嘘を前提にしているとしても、それはまた強い真実を語ることを可能にしてもいるのである。しかしネリー号の上でのマーロウの説明のように、文化的記述における真実は、限られた歴史的環境のなかで特定の解釈共同体に対してのみ意味を持っている。したがってニーチェが思い起こさせてくれるように、「破り捨てる」ことは、検閲の行為であると同時に、意味の創造であり、支離滅裂と矛盾の抑圧なのである。最良の民族誌的虚構のいずれもが、マリノフスキーのそのように、複雑に入り組んだ現実を映している。しかし、そこでの諸事実は、人間科学におけるすべての事実と同様に、類別され、コンテクスト化され、物語られ、強化されているのである（Clifford, 1988, 146）。

#### 4. 再び費孝通に立ち戻って

費孝通の調査地、開弦弓村は太湖のほとりである。費孝通が調査を行う四年前、1932年夏、太湖に遊んだ徐雲石はその広々と雄大な情景を、以下のように記している。

「湖全体の船の数は数百艘以上ある。みな所謂三平頭、四平頭であり、三平頭のもの

はたいてい七帆，四平頭は八帆から十帆，忙しく行き来している。様々な帆が櫛のようにならび，幾万もの蓮の花びらのように空中を舞う。その上，勇壮に日月を飲み込みみんでは吐き出す。暮靄朝霞を映し，趣を成す。遠くからこれを望むと，ただ不可思議な奇景の絵となる」(王, 2005, 232)

『中国農村の細密画』の第一部にあたる「中国農民の生活——一九三六年——」は130頁に及ぶ。その構成は第一章調査対象地域，第二章「いえ」，第三章財産と相続，第四章世帯と村，第五章生計，第六章職業の分化，第七章農業，第八章土地保有，第九章蚕糸業，第十章ヒツジの飼育，第十一章金融，第十二章中国の農業問題となっている。この構成から，開弦弓村が水辺の村でありながら，水との関わりに関する記述が少ないことにあらためて気づかされる。

そこで，敢えて水と関わりのある部分を抜き出してみた。それは以下に列挙する通りである。

### 1-2 経済的な背景

とはいえ，米だけがこの土地の産物ではない。主要作物に比べれば重要ではないながら，小麦や菜種，各種の野菜も栽培されている。さらに，また，水路や湖沼からは，この地で食糧とされる魚やエビ，カニ，さまざまな水草類が得られる(費, 1983, 29)

### 1-3 村の景観

この地域では，重い荷物の輸送や遠距離の交通に，船が広く用いられている。他の村々や鎮との間をつなぐ道路は，主として，船にとって好ましくない流れや風のとき，船を曳航するのに使われる。わずかな行商人以外は，人々は普通この村に船でやってくるし，ほとんどすべての家は，少なくとも一艘以上の船を所有している。交通手段としての船の重要性は，家屋を水辺になければならないものとし，さらにその結果，村の平面図まで決めてしまうことになる。つまり，村落は水路に沿って発達し，水路の合流するところには，より大きな村落が見られる(費, 1983, 30)。

### 5-3 運輸

船は大量の輸送や長距離輸送に広く使われている。しかし村民は自分たちでは船を建造せず，外部から買っている。一艘あたり平均八十元から一〇〇元かかる。農業や漁業に従事しない人々は別として，ほとんどどの世帯にも一艘ないし二艘ある。男も女も船を漕ぐことができる。子供の頃に漕ぎ方を修得している(費, 1983, 81)

### 6-1 基本的な職業としての農業

農業274戸，専門的職業59戸，漁業14戸，無職13戸，計360戸(費, 1983, 90)

### 6-3 漁業

漁業に従事している世帯には，漁業の方法と居住地域を異にする二つのグループが存

在している。村の西端に住んでいる第一のグループは補助的な職業として漁業をやっているにすぎない。彼らの漁法は網と釣りによる。大がかりな漁は農作業が一段落する冬に行われる。

エビは籠細工で作られた一種のわなを使って湖で取る。このエビ漁は湖の近くに住む世帯が共通に従事している。一九三五年夏、私が聞いたところによると、五三艘の船がこの漁をしていた。二人乗りの船で一日当たりの平均収入は一元である。

もう一つの漁業グループは、鵜を水に放して魚をつかまえさせる鵜飼を行っている。鵜を使ったり、訓練するには特殊な技能が必要で、それは家族に伝承される。だからこの職業は世襲である。これらの家族は専門的なグループを成しており、他の村々の同業者と協同することさえしている。彼らは故郷を遠く離れた所にまで出て行く必要があり、加えて夜は鵜を慎重に保護してやらなければならないので、共通の職業上の利害に基づいて、居住地域を越えて結合しているグループを構成している。同じ職業に従事する漁師はすべて、仲間たちどうしで良く面倒をみ合わなければならない（費、1983, 93）。

#### 11-143 信用取次ぎ人の役割をもつ取次ぎ舟

村の商店は、村民の日常必需品すべてを供給することはできない。取次ぎ舟は鎮から必需品を購入する日常のサービスを提供し、村民の販売代理人として行動することによって収入を得る。彼らは村の経済において重要な役割を演じている。この制度は太湖の周辺地域で普通に見られ、その結果、近隣の鎮が特別な発展を遂げた。

取次ぎ舟の存在によって、村の商店は補助的な地位に置かれることになった。村の商店は取次ぎ舟と競争できない。規模が小さすぎて、鎮の商店のように都市の大きな卸売商店に直接商品を注文することができない。彼らは取次ぎ舟と同じように鎮の商店から品物を買う。しかし、村の商人は小売りによって利益をあげなければならないが、取次ぎ舟は買い物をするサービスを無料で提供している。

取次ぎ舟の重要な特徴の一つは、消費者の代わりに買い物をするのではなく、利益を得ないことである。舟に乗って鎮へゆく客も、同じように料金を支払わない。取次ぎ人は一定の手数料をもらって、生産者の販売代理人として活動することにより報酬を得る。

販売するには、村民が必ずしも持っていない多くの技量と、市場についての知識を必要とする。生糸のような生産物を売るときは、村民は取次ぎ人に頼る。取次ぎ人は鎮の買付人にいつも接触していて、それぞれの買付人について、すべてを詳細に知っている。生産者にとっては、自分の特定の生産物の適切な買付人に会うことがもっとも重要である。そこで取次ぎ人の専門家としての助言が必要になる。

生産物の販売について取次ぎ人に手数料を支払った人々は、交通手段としてその舟を使ったり、彼らを通じて商品を注文する資格がある。こうして、このサービスに対する支払いは、客の消費高によってではなく生産高に応じて分与される（費、1983, 138）。

以上の記述から、開弦弓村の多くの家庭に舟があり、それは物の輸送に用いられること、住民の中には少数であるが漁業に従事する者もいること、近隣の小城鎮の商人との間を取り次ぐ取次ぎ船が村の経済において重要な役割を果たしていることは理解できる。

一方、1957年には、開弦弓村の農民の多くが農閑期に従事した、比較的重要な副業として、舟を用いての運輸業に関する詳しい記述が出てくる。

過去に比較的重要だった副業は、農閑期に船を使って市場へ物を運ぶ仕事だった。

船は、この水郷地帯に住む人々にはなくてはならぬ道具である。この一帯の村の建物は、すべて川沿いに建てられているので、川がつまり大通りにあたる。農地によっては周囲をまったく水に囲まれて、小島のようになっていることがあり、船がなければそこへ近づくこともできない。

六百戸余りのこの村には、大小一六〇艘の船がある。これらの船は、交通手段になる他に、農業の面では、肥料に使う川の泥を集めるのに利用するが、それはさほど長い時間は要しない。過去、農閑期になると、農民はこの船を利用して販売や運搬に出かけた。きくところによればこれに使った船はおよそ一四〇艘だったといわれている。彼らの行動範囲はとても広く、ほぼ太湖全体を含んでおり、東は上海、浦東、南は杭州、北は長江、西は宜興、句容にまで達していた。農民達はこの流域のあらゆる水路を熟知しており、しかも多くの近道を知っていた。漕ぐスピードは驚くべきもので、二日で上海に達することができた。販売、運搬する貨物は実にさまざま。たとえば山間地区では、毛竹〔孟宗竹のような太くて大きい竹〕、杉、硬い木材や木炭、海岸地区では干しクラゲ、太湖地区では野菜など、各地域の特産物を生産し、さらにある地区では手工業品、たとえば竹の器などを生産した。彼らはこれらの地区の間を往来して互いに有無相通じ合っていたのである。

この経済は長い間存在していたらしく、この村の農民は皆、上述の産地の農民と伝統的な関係を結び、友好関係を保っているので、A地で品物を信用買いし、それをB地に運んで売り、それから現金をA地に持ち帰って借金を返済するということが可能だった。一方、重要だと思われるのは、運搬に船が使われていることである。船を所有する農民が商人に近い性格を持っているのは、もちろんのことで、これらの船の活動を通じて、各地区それぞれの特徴を発展させることができた。

船に限りがあるので、どの家でもこの活動に参加する機会があるというわけではない。運搬の日取りもまちまちだし、毎回稼ぐお金も同じではない。しかし、ソロバンをはじめてみると、船一艘につき、毎年米七五〇斤相当を稼ぐのは難しくなかったことがわかる。

農業合作社がうちたてられると、この運搬方法は資本主義的だと見なされて、完全に停止された。政府の運輸部門が方法を講じて農村の船の潜在的な輸送能力を利用しよう

としたが、農民はこれにあまり積極的ではなく、一九五六年に輸送活動に参加したのはわずか一〇艘に過ぎなかった（費, 1983, 212）。

上記の1936年には詳しく記述されなかった農民の副業としての運輸業は、先のクリフォードによるマリノフスキー論に従うならば、検閲の対象となり破棄された部分となるのではなかろうか。費孝通がこれを検閲の対象としなければならなかった理由は推測するよりない。

だが、農閑期に運送業者となって広域移動を行う、商人的素養を持つような農民像を描くと、「中国農民の生活」は、民族誌としての完成度は大きく損なわれたであろう。すなわち、「いえ」を単位として年の八ヵ月は稲作に従事するとともに、家内蚕糸業を行ってきた地域であるという前提のもとに、蚕糸業の合作化、現金収入をもたらすものとしてのヒツジ飼育の導入などの1936年時点での変革、土地保有、金融等における問題が描かれているため、前提そのものが揺らいでしまうのである。

当然、費の戦略の中で農民像の創造とそれを基本にした民族誌の作成が行われたのであろう。その戦略の意図は推測すべくもないが、そこに生まれた農民像は「取次ぎ舟を介して鎮とつながり、鎮を通して外部社会との交易を行う定住性の高い者であり、商業には疎く農業、養蚕など生産に従事する者であり、伝統的慣習に取り巻かれて暮らす者」となっている。

## おわりに

2章において鶴見和子が内発的発展論の先駆者として費孝通と柳田国男の比較を行っていることを示した。その論文「内発的発展論の原型」において、今後の課題の一つが以下のように語られる。

柳田が『遠野物語』から『山人考』『山の人生』を経て、最後の『海上の道』に至るまで、一貫して追及したのが、漂泊と定住と一時漂泊の問題である。これはより一般的にいえば、人口移動と社会変化との関係である。ふたりのこの点に関する分析と記述の仕方とを、比較してみることも、わたしはいつかしてみたいと考えている（鶴見, 1996, 85）。

鶴見のこの問いに関し、柳田について、赤坂が『山の精神史』においてある程度の答えを用意している。すなわち、柳田が漂泊民、山人などをその陰画としながら、「常民」概念を創造していく過程を記している。その終章の記述は以下の通りである。

すくなくとも、柳田の思想を発生的に掘りつづけてきたわたしは、常民によって排除

されたモノらにこそ目を凝らさずにはおられない。山人・山民・漂泊民といった他者を鏡に映し出された常民は、いまここにいたって、非農耕民・非定住民の民や被差別の民などの、異質なる他者の排除のうえに成り立つ、それゆえに純化された全体概念と化している。もはや常民は何者かの陰画や補集合ではない、逆に、常民にあらざるモノの全体が常民の陰画として、また補集合として、常民の世界の仄暗い周縁＝闇に沈められたのだ。対概念から全体概念へ。それはしかし、いったい柳田国男の思想を豊かな可能性へと開くことであったのか、それとも、閉ざすことであったのか（赤坂, 1991, 343）。

常民概念の創造は柳田民俗学の戦略である。要するに、赤坂はそこにおいて柳田は、非定住民、非農耕民を排除し、闇に沈めた、というのである。1936年時点での費の戦略もこれに似たものであったかもしれない。一時漂泊や非定住といった曖昧なものを取り除いた、中国の農民らしい農民の創造という。もちろん、単に農耕に従事する者ではなく、農村工業の担い手でもあるという側面は付加されていたが。

なお、解放後の中国においては農村戸籍と都市戸籍という二重の戸籍制度によって、政策的に農民の移動が厳しく制限されていった。これは現代における農民工問題の基盤となるものでもあるが、極めて定住性の高い農民らしい農民が、政策的に創造されていく過程でもあっただろう。最初の問いに立ち返ると、一旦「農民」「商人」といった既成のイメージを与える概念を離れ、個々の地域、個々の集団の生活および生業のあり方をきちんと記述することが、その方法の第一歩となりうるのであろう。

#### 注

- 1 平成15年度～17年度科学研究費研究「グローバル下におけるアジア諸国の観光に関する包括的研究（研究代表者：根橋正一）」

#### 参考文献

- 赤坂憲雄 1991 『山の精神史』小学館  
 東 美晴 1997 『解放前江南農村におけるジェンダーの研究』甲南大学  
 クリフォード・ジェイムズ 2003 『文化の窮状』太田好信他訳, 人文書院  
 (Clifford James, 1988, *THE PREDICAMENT OF CULTURE ; TWENTIETH-CENTURY ETHNOGRAPHY LITERATURE AND ART*)  
 費 孝通 1985 『中国農村の細密画』小島晋治他訳, 研文出版  
 (Fei Hsiao Tung, 1983, *CHINESE VILLAGE CLOSE-UP*)  
 鶴見和子 1996 『内発的発展論の展開』筑摩書房  
 王 叔良 2005 『中国現代旅游史』東南大学出版社